外科処置，あるいは歯肉膿瘍や歯槽膿瘍などの炎症性の歯科疾患と関連のあることが指摘されている。また，ステロイド療法や糖尿病などもONJ発症の全身的な危険因子と考えられている。

ONJの症状は，疼痛，顎骨周囲軟組織の腫脹，骨露出などで，病状の進行に伴い骨露出範囲が広がる。現在，BPの治療法にはまだ明確な指針がないが，抗菌薬投与や限局的な壊死組織の除去など，可及的に保存的な治療が推奨されている。また，BPによるONJの予防には，投与開始前の歯科検診と，抜歯などの観血処置が必要な場合はBP投与前にその処置を終了しておくことが勧められている。さらに，BP投与を受けている患者では，3か月ごとの口腔内健診，毎日の口腔洗浄と0.12%グルコン酸クロルヘキシジンによる含嗽の実施が推奨されている。抜歯はできるだけ避けるべきで，抜歯を要する場合は3か月程度，BPを休薬することが提唱されている。

当科で経験した，経口BPと静注BPによるONJの症例各1例も提示した。

一般演題

演題1．テキストマイニングを用いた定期健診受診者の心理分析

○杉浦　剛，相澤　文恵，岸　光男，
阿部　晶子，稲葉　大輔，米満　正美

岩手医科大学歯学部予防歯科学講座

目的：テキストマイニングはテキストデータをさまざまな計量的方法によって分析し，役に立ちそうな知識・情報を取り出す手法であり，人間の行動，態度，心理，価値観などを理解するための新しい手法として社会調査などに応用されている。本研究ではテキストマイニングの手法を用いて定期健診に対する受診者の感想の分析を試みた。

対象および方法：2007年3～5月，岩手医科大学附属病院予防歯科外来にて定期健診を受診した59名を対象に質問紙調査を行った。質問内容は性別，年齢，定期健診の継続期間，定期健診の感想，定期健診に対する満足度であった。定期健診の感想は自由回答形式とし，満足度は「まったく満足していない」を0点，「非常に満足している」を10点としたSD法の尺度を用いた。得られた結果の解析は統計解析ソフトSPSS12.0J，Clementine10.1およびText Mining for Clementine2.2Jを用いて行った。

結果：受診者は男性30%，女性70%，年齢層は10代，30代，50代が多く，2年以上定期健診を継続している者が53%であった。定期健診に対する満足度は平均9.2と高い値を示した。性別，年齢，定期健診の継続期間と満足度との相関はみられなかった。テキストマイニングの結果，出現頻度の高いものとして「歯」「定期健診」「安心」「思う」「よい」「とても」「歯ぐき」などのキーワードが抽出され，これらの単語は同時に出現する確率も高かった。

考察：出現頻度の高い単語どうしの組み合わせから，受診者は定期健診に対して，「歯と歯ぐきにとてもよいと思う」「定期健診によって歯（の状態）に安心する」という文章が再構築された。一方，満足度に影響を与える要因は抽出されなかったがこれは満足度のスコアが高い範囲に集中したことによると考えられた。今後，調査対象ならびに調査項目を増やしてデータを蓄積し，より客観的な要因分析を行う必要があることが示唆された。

演題2．国民健康保険診療施設歯科診療所を研修協力施設とした地域医療およびへき地医療研修

○工藤　義之[1)]，岸　光男[1)]，熊谷　啓二[1)]，
中村弥栄子[1)]，柳谷　隆仁[1)]，遠藤　憲行[1)]，
金村　清孝[1)]，古屋　純一[2)]，齋藤　亮[1)]，
浅川　麻美[1)]，八木　實[1)]，佐藤　健一[1)]，
大平　千之[1)]，岡田　伸男[1)]，柴崎　信[1)]，
星野　正行[1)]，高谷　直伸[1)]，古川　良俊[1)]，
織田　展輔[1)]，浅野　明子[1)]，大久保卓也[1)]，
野村　太郎[1)]，瀬川　清[1)]，清水　潤[3)]，
藤原　秀世[4)]，三浦　廣行[1)]

[1)]岩手医科大学歯学部総合歯科臨床教育センター
[2)]岩手医科大学歯学部歯科補綴学第一講座
[3)]奥州市国民健康保険まごころ病院歯科口腔外科
[4)]普代村国民健康保険歯科診療所

目的：すべての研修歯科医が訪問診療，地域歯科保健活動を含む地域医療の修得およびへき地における歯科医療の経験を目的として，平成18年度本学歯科医療センターの臨床研修プログラムでは国民健康保険診療施設歯科診療所9施設において研修協力施設研修を実施した。本研修の分析と改善点の抽出を目的とした。

対象と方法：岩手県国民健康保険診療施設歯科部会が研修受け入れ施設を対象として平成19年3月に実施したアンケート結果をもとに本研修の分析と改善点の抽出を行った。
結果と考察：多くの施設が歯科保健活動，他職種との連携，訪問診療に関連する行動目標を設定した。訪問診療，歯科保健活動はほとんどの施設で実施された。受け入れ側の歯科医師は研修歯科医が研修目標をある程度達成したと考えていた。研修歯科医の態度についてはすべての施設から概ね良好であると評価された。研修歯科医の受け入れが大きな負担となった施設があったことから，今後は研修期間の延長と各施設に適した人数調整等の改善が必要である。また8施設の歯科医師が今後も研修歯科医の受け入れが必要である。今回の研修を通じて歯科保健活動，訪問診療を含む地域医療およびへき地における歯科医療を研修歯科医全員が修得することが可能であった。
結論：1）多くの研修歯科医が地域歯科保健活動，訪問診療を含む地域医療歯科医療について修得することができた。2）研修歯科医全員がへき地における歯科医療ついて経験することができた。3）訪問診療や地域保健活動の日程を考慮した研修日程の策定が必要である。4）研修人数，研修期間，管理型臨床研修施設と研修協力施設間の移動ならびに研修協力施設と宿舎との移動手段について改善する必要がある。

演題3．ポジティブチェンジに基づいたワークショップによる平成18年度岩手医科大学歯科医師臨床研修の検討

○工藤　義之[1)]，岸　光男[1)]，熊谷　啓二[1)]，
中村弥栄子[1)]，柳谷　隆仁[1)]，遠藤　憲行[1)]，
金村　清孝[1)]，古屋　純一[2)]，齋藤　亮[1)]，
浅川　麻美[1)]，八木　實[1)]，佐藤　健一[1)]，
大平　千之[1)]，岡田　伸男[1)]，柴崎　信[1)]，
星野　正行[1)]，高谷　直伸[1)]，古川　良俊[1)]，
織田　展輔[1)]，浅野　明子[1)]，三浦　廣行[1)]

[1)]岩手医科大学歯学部総合歯科臨床教育センター，[2)] 岩手医科大学歯学部歯科補綴学第一講座

目的：岩手医科大学附属病院歯科医療センターでは，全身管理と地域医療を特色とした複合型研修プログラムに沿って平成18年度歯科医師臨床研修を実施した。ワークショップにより本研修プログラムの評価ならびに改善法を探ることを目的とした。
対象と方法：本院歯科医療センターで歯科医師臨床研修を行った研修歯科医49名および指導歯科医18名が参加のもと「良い点」，「強み」すなわち潜在力を抽出し，それらを活かして組織改善を図る，いわゆるポジティブチェンジに基づいたワークショップを平成19年3月に開催した。ワークショップでは，岩手医科大学歯科医師臨床研修における潜在力の抽出と，その潜在力を活かした改革方略について検討した。
結果と考察：管理型臨床研修施設での研修を主に担当している総合歯科臨床教育センターで平成18年4月から実施している保存，補綴，口腔外科の認定医，専門医，指導医によるグループ医療が岩手医科大学歯科医師臨床研修の潜在力の中心（ポジティブコア）として抽出された。歯科医師臨床研修の改革方略としてグループ医療をさらに充実させることで岩手医科大学歯科医師臨床研修を改善できる可能性が提案された。グループ医療の充実のためには，総合歯科臨床教育センターで採用しているPOS（Problem Oriented System）プロトコールの有効利用による情報共有の強化，ならびにグループにおける指導歯科医の専門分野のバランスを保つ必要があることが示唆された。

演題4．新たな咬合位を設定した間欠性ロックの一症例

○金村　清孝，田邉　憲昌，藤澤　政紀*，
石橋　寛二

岩手医科大学歯学部歯科補綴学第二講座
明海大学歯学部機能保存回復学講座歯科補綴学分野*

緒言：長期にわたる間欠性ロックを呈した症例に対して咬合的アプローチによる治療を行い，良好な経過を得たので報告する。
症例概要：患者は34歳　男性（平成15年9月6日初診）。口が開きにくいことを主訴に来院した。7～8年前，ひっかかったように口が開かなくなるという初発症状に対し，左側顎関節部を手指で圧迫することで自力ロック解除が可能であることに気付いたという。半年前からロックが頻発するようになり盛岡市内病院歯科を受診。スプリント療法を行なうも改善せず，当科を紹介受診となった。下顎の外傷等の既往はない。開口量はロック解除前10㎜　解除後45㎜であった。
治療経過：初診時MRIで右側に関節円板の転位は認